
犯罪者達のレクイエム

え c s

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

犯罪者達のレクイエム

【コード】

N6600C

【作者名】

えっす

【あらすじ】

ヤクザの息子である少年はある日一つの事件で世界が変わることになった。

一話

「ジリリリリリ!!!!!!」

「う・うん・バン!」

俺は眠い目を擦りながらやかましく鳴り響いている目覚まし時計を叩き活動を停止させる。

「ふわあ〜・・・」

まだ完全に覚醒していない頭を回転さしながら俺はパソコンと本棚とベットしかない殺伐とした部屋を出るためドアノブを握り回す。普通ならここからはリビングで朝食とくるが内の家は違う。

「おはようございますっっ!!!ぼっちゃん!!!」

と俺の目線より腰を下げて大柄な男二人が俺にあいさつする。

「あのさあ・・・『ぼっちゃん』はやめてくれよ・・・」

「はっ!!!し、しかし組長の意向ですので!!!」

「あああ〜〜もういいよ!朝から大声は聞きたくない!」

「す、すいやせんしたああ!」

「はあ・・・」

俺は朝からの騒音になんとか負けずに廊下を歩く。リビングへの道のりにもさっきの光景が繰り返されると分かりつつも、

「はあ・・・」

俺はため息をつきリビングへと向かう。

そう、俺は生まれながらに ヤクザ の息子である。しかも組長の息子である。

今の時代、ヤクザも厳しい状況にある。

シノギも取れなくて潰れていく組。

抗争で壊滅した組。

まあ色々ある。

だが内の組は先祖代々江戸時代から続くヤクザである。

シノギは何もしなくても入ってくるし、抗争には絶対に負けなくらいの人数とそれなりの前科を持った奴もいる。

政治家にもパイプが何本もあり、また警察にもある。

そう、俺は生まれながらに最高の家庭に生まれたってわけだ。

まあこんな愚痴をこぼしたところで俺の世界は変わらない。

俺は昔から『ヤクザの息子』というレッテルを貼られ、小学校、中学校、と一歩引かれていた。

周りの態度はよそよそしく、いつも孤独だった。

そんな時いつも傍にいて助けてくれたのは母だった。

そんな母も俺が小6のときに死んだ。

病気ではなく、

襲撃されそうになった俺を庇って

だ。

母と住み込み組員達の為の夕食の準備にスーパーに買い物に行く途中だった。

歩道を歩いていた俺たちに近づいてきた黒いベンツ。

俺は久しぶりの母との外出で普段見慣れている堅気（普通の人間のことです）の人間は普通は乗らない黒いベンツの存在に気づかなかった。

そして近づく車。

そつと俺たちの隣に速度を落とし寄ってくる。

そして窓が開く。

そして母は気づいてしまった。

車の存在に。

そして俺は気づかなかった。

車の存在に。

母は俺を瞬時に抱きしめ車道に背中を向ける。

俺は母を笑顔で抱きしめ返す。

そして母は撃たれ、俺に寄りかかる。

「キイイイツツ!!!」

その瞬間車は走り去る。

銃声を聞きつけた人間が集まってきた。電話越しに叫ぶ女。母の背中を押さえている男。

全ては思い出せない。

しかし、一つはつきり覚えていることがある。

父のことだ。

父はヤクザながら温厚な人だった。それに不満を言う組員もいたが、経済的には父が今までの代では一番裕福であった。

しかし父が切れた。

温厚な父が目を血走らせながら四六時中怒鳴りまくっていた。

「何考えとんじゃ!! おうコラ!! はよ探さんかい! 何使ってもええ! 探せ! 連れてこい!!」

父の初めてのヤクザとしての一面を垣間見た俺は恐れた。父の顔はまさに鬼のような顔をしていた。泣いているのに怒っている。そんな微妙な顔だった。

そして数日後判明したのが敵対組織『三坂組』が母を殺したという事実だった。

それが分かってからの父の行動は早かった。

最初は自分が単身で乗り込むと言っていた。しかし他の組員の説得により納得したが、その後の父の行動は凄かった。x日x時x分金融組織『三笠組』に役20人のヒットマンを送入。

『三笠組』組員全員殺害、組長は生け捕り。

同時刻、役100人の組員を送入。

『三笠組』組員の家族全員殺害。

『三笠組』組長は少し惨い話になるが、四肢切断、臓器の一部売却され、今は内の組直属の病院で保管されている。

死んではいない。生きたまま、である。

かくして『風間組』組長の嫁殺害の『三笠組』は一夜にして壊滅した。

当然普通なら警察が黙ってはいない。

しかし、このことはメディアも警察も関与しなかった。

後に当時の『風間組』組員幹部の佐竹さんに聞くと渋々ながらも教えてくれた。

「あれはなあ、組長がコツコツと長年調べて獲得した政治家や警察幹部、各メディアの裏情報、その他諸々の裏事情をあの時使って警察やメディアの報道を防いだんやろなあ。俺たちも事実、組長自身から聞くまで知らなくて不思議に思っていたんだ。それがまあ、聞いたときは背筋が冷たくなったのお。『この人はどれだけ組のこと考えていて、すごいんだ』ってな。餓鬼みたいな感想やけど本当にそう思えてまうわ。アカンなあ、ほれ、秀は早く宿題しい。」

それを聞いたとき俺も背筋が凍るような感じがした。日ごろ温厚で組長のくせに一人呑気にぶらついたり、普通に仕事よりも家族の行事を優先していた父がそこまで凄いななんて思ってもみなかった。

だがそれよりもまず忘れられないのが、あの父の鬼のような顔だ。ああ……思い出すだけで背筋が冷たくなる……

俺はもう何度も聞こえてくる大声で目が覚めた。

所詮父もヤクザだったのだ。

そんな考えを振り払い、リビングのドアの前まで来た俺はまたもやドアの傍に立っている二人の組員に挨拶する。

「おはようございます、佐竹さん。朽木さん」

佐竹さんは190センチの巨漢で顔もモロヤクザ。しかし実は結構優しいところもある。

この前道で倒れていた猫の死体をわざわざ拾ってきて内の庭に埋め墓を作るといふ感動的な人物なのだ。

「うつす。秀。元気か？」

そしてもう一人が朽木さん。

この人は背はそこそだが顔がいつも笑っている。なんとというか掴みどころのない人だ。以前殺人事件で2回服役していたらしい。

「おはようさん〜秀君」

「二人ともおはようです」

そうして俺はドアを開けて部屋に入る。

そこは普通のテーブルとキッチンなどがあり、俺が思うに普通の家庭の空間だった。

そして俺はキッチンでエプロン姿でフライパンの卵に睨み合っている父に挨拶する。

「おはよう、父さん」

俺に気づいたのか父はフライパンから目を離し俺に向き直る。

「おお。おはよう。今日はスクランブルエッグだぞ」

「またスクランブルエッグ？4日連続じゃん」

「む、そうか。まあいいじゃないか。ほれ食べる食べる」

「うん」

そうして朝飯をかつ込む俺。

「学校、楽しんでこいよ」

「それどういう意味？喧嘩を楽しめって？」

「馬鹿。そんなわけないだろう。普通の学生生活を乐しめ、と云っただ」

「普通の学生生活ねえ……」

「ふむ……やはり……重いかな？」

「何が？」

「ヤクザの息子という肩書きだよ」

「ああ。まあ今となっては別にどうでもいいよ」

「そうか……」

「じゃ俺は学校行くね。今日は初登校、っていつか入学式だから。弦白高校ってさ、面白そうだよな」

「あ、ああ」

「?まあ俺は時間ないから行くね」

「……あ、ああ。いつてらっしやい」

「……行ってきます」

俺は適当に会話を切り上げリビングを出る。父さんの少し難しそうな顔に不安が過ぎつたが気にしないことにする。

そしてまた自室に戻る。その途中にもまた変な光景と大声が俺を悩ませる。

エプロンをつけた大柄な大人達、そいつらが俺に

「おはようさんですっっ!!ぼっちゃん!!!」

なんて言いやがる。気持ち悪いし、うざい。

「ああ、おはよう」

やっとの苦勞で部屋に着いた俺はもう一度ベッドに横たわる。

ああもうこのままもう一回眠りたい。

しかし俺はそんな欲望に負けずに起き上がり制服に着替える。中学

校というのはなんでこんな面倒くさいのだろうか。

まあいい。今の俺のやることは学校に行くことだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6600c/>

犯罪者達のレクイエム

2010年10月22日00時48分発行